

小川和男先生を偲んで

国際学部教授

大 島 梓*



本学国際学部教授小川和男先生は、2000年9月に胃の摘出手術を受けて以後、一旦は元気になり大学の授業に復帰されたが、再び療養のため休学中のところ、2002年7月19日逝去された。誠に残念なことであった。

小川先生は、国際学部の創設者菊地昌典先生の招請を受けて、1998年4月本学教授に着任されたのであったが、奇しくも菊地先生と同じ胃癌が原因で亡くなられた。享年も同じ67歳であった。ここに小川和男先生を知る古き友人の一人として、彼が成した大きな業績と人柄を偲んで、その一端だけでも記しておきたい。以下、内容的には専ら敬愛大学以前の時代に溯るので、敢えて先生という敬称を略させて頂く。

*おおしま・あずさ Azusa Oshima: Professor, Faculty of International Studies.

小川和男氏は1935年東京深川の生まれである。大学卒業後、東京都庁統計課、日本貿易振興会（JETRO）を経て1972年、（社団法人）ソ連東欧貿易会（現、ロシア東欧貿易会）に入社する。以後長期間ソ連（ロシア）東欧諸国の経済調査に従事してきたが、この分野では早くから我が国を代表するエコノミストの第一人者として知られ、ライフワークとなった日ロ貿易の促進に大きく貢献した。99年には彼のロシア経済の研究業績と日ロ経済関係の発展に尽した功績に対して、ロシア科学アカデミーから名誉博士号が授与された。

彼が30年の長きに亘り勤務した「ソ連／ロシア東欧貿易会」（以下、ソ東貿／ロ東貿と略称）は、戦後通産省の支援の下に貿易商社、メーカー、銀行などを会員として、ソ連・東欧諸国との貿易・経済関係の促進を目的に設立された事業組織である。同社では小川氏は終始一貫調査部門を担当しつつ、1988年に常務理事、95年には専務理事に就任、その運営を一手に引き受けてきた育ての親であり大黒柱であった。

ソ東貿はソ連、東欧諸国の経済、貿易動向の調査と分析を主たる業務として、これまで関係業界、官公庁、報道機関などに情報と資料を提供しつつ、日本の同地域との貿易の促進に大きく貢献してきた。例えば、1970年代に入り日本財界大手企業は、我が国では全く未経験で、フィージビリティ評価の困難なガス、鉄鋼、石炭、木材などの「シベリア資源開発」大型プロジェクトに取り組み、その結果日ソ間貿易は飛躍的に増大し両国関係は進展したが、この大プロジェクトの成功にはソ東貿によるソ連、シベリアに関する資料と情報提供、経済分析が極めて大きな役割を果たした

のであった。

小川氏の調査活動の中でも特筆すべきは、1956年の創刊以来46年間の歴史をもち、日本におけるソ連・東欧経済に関する最もリアルな情報源として評価の高い、ソ東貿『調査月報』の継続発行であった。彼の経済調査は、統計資料の収集と分析に止まらず、同時に定期的な現地実態調査で裏づけるという、実証主義的手法によるものであった。そのため彼の調査報告、分析評価は常に数字と現場検証を踏まえた説得力のあるものであった。

彼は足の障害というハンディにもかかわらず実に広く歩き回った。ロシアを中心にかつてのソ連邦構成共和国や東欧諸国を繰返し、広範囲に訪問した。出張回数は毎年数回、延べ百数十回を数え、コーカサス、中央アジアへも度々足を伸ばした。さらにソ連崩壊後は、開放されたロシア極東に注目、北朝鮮、中国、韓国、日本を繋ぐ環日本海経済圏構想の発案者の一人として、ロシア極東と中国東北への訪問回数が多かった。

彼が築いたもう一つの遺産は「日ソ経済専門家会議」の開催であった。それは日本、ロシア両国の有力経済学者、エコノミスト、企業・金融界などの専門家からなる、両国経済に関する情報交換と交流の場として発足、1978年以来ほぼ毎年モスクワでの会議開催と地方視察が行われてきた。日本からの訪問団は、金森久雄氏（日本経済研究センター会長／当時）を団長に総勢約10名の定例メンバーで、ロシア側からはL・アバルキン博士（経済改革大臣／当時、ソ連科学アカデミー経済研究所長）はじめ外国貿易省付属景気研究所、国民経済研究所、世界経済国際関係研究所などから多数が参加した。この専門家会議は日本側にとって、ロシアの代表的エコノミスト達から、最新の経済情報と動向を直接知る上での貴重な

場となった。

このような交流の場を小川氏が20年以上に亘ってもち続け得たのは、何よりも彼がロシアについての深い知識と理解をもち、常に自らの目で見えた事実をありのままに内外に伝えようという姿勢を堅持したからであった。彼のロシア観は基本的には肯定的であり楽観的であった。これに対しては日本のエコノミストや識者の多くは批判的であったが、彼は常に「ロシアは豊かな大国。知れば知るほど奥の深い魅力的な国だ」と言っていた。かつてソ連崩壊と混乱の当時、日本はじめ西側ジャーナリズムは一斉に「ロシア国民は飢餓に直面している」と報じたのに対し、現地視察した金森久雄団長は「ロシアの犬はみな肥っている、人間が飢えている筈がない」と帰国報告し多くの同感を得ていたが、それは日頃の小川説に一脈相通ずるものであった。ロシア人はこういう小川氏を評価し、信頼し、受け入れた。ロシア人は大国主義的で、実利主義的な面が強いが、一方では人間性豊かで、人との信頼関係を重視する国民である。

彼は真面目で努力家であった上その温厚な人柄により、多くの人々から親しまれ、信頼された。重厚感があり、ゆっくりした語り口であるが、話好きだった。人情深く、面倒見の良さからも友人後輩から頼りにされた。短い期間ではあったが敬愛大学のゼミ生や留学生達からも慕われていた。しかし反面意外に短気で怒りっぽいところもあった。出張訪問先のロシア人に対しても本気で怒り出す場面もあった。そこには短気だけでなく、下町に生まれ育った江戸っ子気質の発露もあったと思う。下町っ子といえば、彼は「僕はもの書きの職人だ」と言っていたが、これは研究者として

の謙遜と共に、自らの仕事に対する自信と自負のほどを感じさせる言葉でもあった。彼の主要著作は文末記載の通りだが数多くの有益な著書を残した。他にも出版された書物を含めるとその数は20冊を優に超えている。ワープロ、パソコンの類は性に合わないとして手書きを通した。

仕事柄とはいえ彼は何よりも旅行が好きであった。筆者は1980年代の初期から、「日ソ経済専門家会議」にはほぼ毎年参加してきたが、今でも彼と旅したボルガ河周遊の船上日ソ専門家会議、ウラルの軍需工場視察、コーカサス山脈を越えてグルジア迄の軍用道路、猛暑のサマルカンド、大連、ハルビンからマンチューリの中ロ国境を越えてイルクーツクに至る中国とシベリア鉄道の長旅など、数多くの印象的な光景が目に見え、彼は自らの足の痛みを堪え、私達団員に気を配りつつ、愛するロシアをはじめ、素晴らしいユーラシアの世界を隈なく見聞、踏査して回った。彼にとっても私にとっても、共に旅したあのころは生涯の最良のひとつときであった。

彼と付き合っていて楽しかったもう一つの思い出はグルメであった。彼は酒は飲まなかったが食べ歩きが好きだった。彼に案内されたロシアのレストランもよかったが、なんと言っても深川から浅草にかけての、昔からの東京の味を誇る、蕎麦、鮎、鰻、泥鰌、てんぷら屋などはみな「いい店、うまい店」であった。年末にはロ東貿の支援者達皆が彼を囲んで集まる、恒例の“ウォッカパーティ”を楽しみにしていた。仕事も、旅も、グルメも彼は自分の信念と好みを全うしたと思う。そんな彼がいなくなって本当に淋しい。ご冥福を祈る。

2002年 9 月30日

小川和男教授略歴

- 1935年 東京深川に生まれる
1961年 東京外国語大学露西亜語学科卒業
1961年 東京都庁総務局統計課
1964年 日本貿易振興会調査部
1972年 ソ連東欧貿易会入社、主任研究員、調査部長を歴任
1986年 新潟大学経済学部教授
1988年 ソ連東欧貿易会常務理事
1995年 ロシア東欧貿易会専務理事
1997年 同付属ロシア東欧経済研究所長
1998年 敬愛大学国際学部教授
1999年 ロシア科学アカデミーより名誉博士号を授与される
2002年 逝去（享年67歳）

主要著書

『ソ連の対外貿易と日本』1983年、『ゴルバチョフ改革』1986年（以上、時事通信社）、『ペレストロイカの経済学』1988年、『東欧に何が起きているか』1990年（以上、ダイヤモンド社）、『ソ連解体後——経済の現実』1993年、『東欧・再生への模索』1995年、『ロシア経済事情』1998年（以上、岩波新書）、『北東アジア経済紀行』1996年（日本経済評論社）、『最新ロシア経済入門』2000年（共著・日本評論社）、『ロシア・CIS 経済ハンドブック』2002年（共著・全日出版）、『日本・ロシア経済関係の新展開』2002年（JETRO）ほか多数。